筑波大学哲学・思想学会創立二十周年記念シンポジウム

信と知のゆくえ
――世紀末をこえて――

質疑応答

司会（伊藤） ただいまのお三方の発表ですけれども、まず棚次先生が知を二重に考察され、その二重性に対応して信もまた、二重の構造をもっているのではないかと指摘されました。棚次先生は、信と知の問題を総括的に考究されたわけです。次に、桑原先生は、特に信に比重を置いて、トマス・アクィナスを中心に、物語性、すなわち、共同体の物語性をいかに信じるかというところに信の根本があると述べられました。名須川先生は、デカルトにおける学知と信仰との区別が、学知によってすべてをぬりこめようとするような態度を示すものではなく、むしろ学知の限界を見定めていって、その彼岸、向こう側に、信仰の場を確保しようとするものだと主張されたわけです。さて、漠然と申し上げても、提題者の先生方はお困りになるかもしれませんが、それぞれのお立場に違いもあるかと思いますので、何かお互いに意見を戦わせたい点がございましたら、どなたがどなたに対しても結構ですので、どうぞ御遠慮なくご発言ください。

棚次 本シンポジウムのテーマが「信と知のゆくえ」ということでございますので、やはりゆくえということについても、いずれ何らかの仕方で答えなければいけないと思っておりますが、その前にですね、パネリストの方々は、私も入るわけですけれども、桑原先生は、トマス・アクィナスの専門家ですし、名須川先生はデカルトの専門家で、それに比べて私は何もないということで、非常に大雑把な話をしたのですが、どちらかというと西洋に片寄っているので、そのバランスを少しとるためにも、ことさら仏教でどう考えているかということをお話いたしました。お二人の先生方のお話を伺っていて、あまり違和感がないと言いますか、おっしゃる通りだと私は思えて、非常に納得するわけでございますけれども、他の先生はいかがでしょうか。

桑原 私も同じような印象を持ちました。質問させていただくとすれば、時間の制約もありますので、棚次先生に一点だけ補足していただきたいと思います。先ほど「覚の宗教」と「信の宗教」ということをおっしゃったわけですね。覚の宗教においては、当然、直観知ということが非常に重要な意味をもってくるということが御主旨であったと思いますし、それはそうだと思いますが、この点、私自身の発表と引きつけてどう重なってくるのかどうかを伺いたいと思います。つまり信の宗教の中において、直観知というものがどのように位置づけられるのかという点について、見通しをお教え頂ければと思います。もちろん、信の宗教というと、結局は聖書のユダヤ、キリスト教の伝統ということになってしまいますので、恐らく敢えて東洋に重きをおいてということで、覚の宗教という方面に力点を

置かれたと思いますが、信の宗教についての補いをしていただければ、と思います。

それから、せっかくの機会ですから、名須川先生にもおたずねします。信仰の真理に場を確保するために、いったんはそれを排除しているけれども、その先に見えるようにすると。その際、私自身の発表の中でも信仰には意志の関与が非常に強いということを申しましたが、ただやはりトマスですと、やはり基本的には信仰 fides というのは、intellectus の habitus になるわけですね。デカルトにおいて、信仰は意志に属すると言いながら、では知性の役割は、果たして全くないのか、そのあたりについての見通しはどうなのかということについて、もう少し補足していただければ幸いと存じます。

棚次　信の宗教ということでございますが、これはあくまで宗教の類型として考えております。さきほどの発表では触れることができませんでしたが、覚の宗教ということから見まして、上田閑照先生の分析を参考に致しまして、結局、覚と自覚と理解という三重の知の構造を考えております。ただ上田先生の分析は、西田の哲学をどう理解するか、そして禅との関係をどう捉えるかということで考察されていまして、信の宗教というレベルは、直接入ってこないんですね。対等な関係にあると見なしますと、信ということに関しましても、何らかの構造があるだろうと、重層構造があるだろうということです。例えば覚の対極に信を置くならば、信の内部構造として、信心だとか信仰ですね、こういう関係を想定することができるであろうと考えたわけでございます。

覚というのは物事の本質を見るということになりますね。一挙に見るということになります。これは直観の要素ですが、信というのも、ある意味で絶対者の言葉を聴く、あるいは原音を聴くといいますか、通常の聴覚よりももっと高次な働きとして、絶対者の言葉を聴くということでございまして、これもやはりなんらかの形で直観のようなものが関わっていると思わざるをえません。さきほどの話ですと、信仰ということにおいて、意志の働きが重要であるというお話がございました。それはその通りであろうかと思いますが、それと同時に直観の要素があるだろうと。そうしますと、覚—自覚—理解という知の構造と信—信心—信仰という構造が、パラレルであると考えるならば、信心あるいは自覚のレベルで重要になってくるのは、象徴あるいはイマージュということであろうと思いますね。そして、理解とか信仰とかいうのは、いままでどおりの議論の通りですね。概念の働きに基づいて行われていくということになろうかと思います。私の見通しでは、直観と概念の関係は、従来、何らかの形で、論じられているかと思いますけれども、両者を媒介するものとして、象徴の働きがあるだろうと、そしてそのように象徴を捉えていく人間自身が、一種象徴的存在だろうと、そんなことを漠然と考えております。

名須川　桑原先生からいただいた問題というのは、デカルト解釈においても非常に大きな問題で、デカルトの中で、主意主義的な立場を採ったのか、主知主義的な立場を採ったのかということは、解釈上の大きな論争を巻き起こすような部分になっているとは思います。しかし例えば『規則論』の知識論に限定した場合には、やはり知ることということは、それを正しいと確信することだったわけで

す。そういう意味では、信と知というものは、まったく寄り添いあうものであるわけですけれども、ただ信仰の問題になった場合に、すなわち信仰という意味で fides という言葉を使った場合に、一応、学知からは締め出されなければならないというところがあるわけです。ところが、学知の確実性というものを探究して、原理的な認識をしていった場合に、その原理がどのようにして措定されるのかということにおいて、彼は attentio つまり「注意作用」が重要であると指摘しております。実際、デカルトが「直観」について言っている箇所で、「純粋でかつ注意深い」と表現しているんですけれども、ここで、attenta という形容詞を用いておりまして、そういう注意深い mens の働きが直観であると、認識の機能、作用性の方から言っているわけです。そういう意味で、ここでデカルトの言う「直観」が極めて意志的な働きであることは確かなわけです。それでありながら、fides に通じるような意志をもっていないわけです。ではそこで、信仰に直接つながるような意志と、それからこういう学知を形成するときの意志というものはつながっているのか、途切れているのか、それとも意志そのものの中に何かグラデーションのようなものがあって、それで非連続でありながら連続しているというような言い方をするのか、こうした問題に対してデカルトのテキストの中で考えていくのは易しいことではありません。やはり、デカルト哲学を考証していくときの論証の仕方というものがありまして、『省察』の中でどのように考えているのかということを捉えていかない限り、難しい話でありますし、それから『規則論』以降のコギト・エルゴ・スムという命題がどのようにして措定されたのかということも、もっと深い次元で知解 (intellectus) と意志 (voluntas) という概念を捉えながら、これを読み解いていかないといけないと思います。お答えになっているかどうかわかりませんが。

司会　桑原先生、ただいまのお二方のお考えを御聞きになっていかがでしょうか。

桑原　大変けっこうだったと思います。

司会　では、今、桑原先生からご質問があったわけですが、逆に棚次先生あるいは名須川先生の方から桑原先生への質問はございませんでしょうか。

棚次　いきなり、お二人の発表を拝聴致しまして、あまりよく理解できていないところがありますので、的はずれな質問なのかもしれませんけれども、桑原先生は、近代の知が遠近法の排除として成り立っている、それは物語性の否定だというお話をされて、信仰を何らかの宗教的物語を承認すること、承認を与えること、これが信仰だと言って、物語ということを強調されたかと思うのですが、これはイエス・キリストの物語でもあるし、それを受けとめる信仰者の人生の物語ということでもありますね。なぜ物語をそこまで強調されるのかということをお尋ねしたいと思います。と申しますのは、私が今日お話したことから言いますと、核心部分は、覚だとか信ということになりまして、直観ですね。直観というのは、全体的に一挙にものの本質を見るということで、ある意味で言うと、そこで物語性が凝縮して把握されていると言えなくもないのですが、一応時間の経過の中で人生が送られていって、歴史が展開されていって、それを物語という形で再把握するということがあると思うんです

ね。なぜ物語をそこまで強調されたのかということがお尋ねしたい点ですね。

それから名須川先生のお話も、ちょっと聞き漏らしたところがありますが、デカルトが学知と信仰の関係を、簡単に言うと、どのように考えていると受けとめればいいんでしょうか。つまり、デカルト自身の哲学者としての立場は当然あるんでしょうけど、それとはまた別のところで、彼は何らかの信仰に近いものをもっていたのかどうかという問いともつながってくると思うんですけど。以上よろしくお願いします。

桑原　物語を強調した理由は、いろいろあります。まず私自身がさしあたってトマスという、物語性の希薄に見える、非常に概念的な言語を用いて語っている思想家を扱うことからくる、ある種ひとつの愚痴のような思いもあります。トマスの専門家の世界ですと、トマスのテキストで語っていることを忠実に要約していくということが、一つの手堅い方法ということになっているんですね。ただそれで、本当に何が問題なのかを考えていこうとしたときに、つまりわれわれの実生活に即した時のトマスの意味や、信仰や宗教、哲学の意味を考えようとしたときに、何か一つ切り口がないのかといろいろ悪戦苦闘した結果、一つの方向性として、物語を考えてみようと思ったわけです。またもう少し広い文脈で言えば、ポストモダンとか、遠近法とかいうことに注目する動きがあって、そういう時流に私自身も絡んでいるのだろうと思います。あるいは物語ということに関して、共同体というもののベースを考えてゆこうという私自身の基本姿勢も背景としてあると思います。基本的にはトマスが問題にしている、さしあたって非常に抽象的なスコラの用語で語っていることの意味を、もっとわかりやすく理解する文脈というのは、実は何か物語的な文脈というところに近づいて行った方が見えてくるのでないかという、私の方法的な思い入れがあります。なおかつキリスト教というものが私の研究対象にとって大きな意味をもつファクターになっています。これは非常に歴史的物語的な、信の宗教という時間の中で展開する宗教ですので、物語性ということを前面に立てて、考えていくということによって、いろいろなことが見えてくるのではないかということです。そして私もさきほど時間に追われまして、早口で読んだのですが、その中で信仰の話だけをしたわけですけれども、実は知解とか知ということがおそらく物語性の凝縮ということで、一部うかがい知れるような瞬間があるのではないかと考えています。これはおそらく棚次先生に投げかけた問いへの、私自身の答えとなりますが、歴史とか物語性の中で、イエス・キリストとの出会いの場面において、信仰者の生の物語の全体性がある凝縮された形で見えてくるという形で、一番根源的な何かが展開される。それを、トマスはトマスなりに一つの言語において指しているのではないかということを明らかにしてみたかった。ただ一点補足しますと、ただそれは垣間見られるのであって、それを言わば神の視点からその知はこのようなものだとは、実は言えなくてですね、人間の側から見ると、その全体性はやはり、伏せられているという所で、ある種の信に留まらざるをえない部分があるであろうという見通しもあるわけです。

名須川　棚次先生からいただきました問題というのは、非常に難し

い問題です。というのは、デカルトのテキストというのは、デカルトの学問、あるいは形而上学というものに限定されて書かれておりますし、また、そのことをめぐって、書簡の中でやりとりされているからです。彼自身のいわば実存的な問題といいましょうか、生けるデカルトというのはどのようなものだったのか、その中で彼自身の神というのはあったのかどうかというご質問だと思うのですが、これに関しては、直接お答えするのは難しいので、それではなぜデカルトがここまで知を限定して、その中で確実な知を求めていこうとしたのかということから考えていくと答えやすいのではないかと思います。デカルトは懐疑主義との対決をせざるをえなかったのですが、その背景に、実は、キリスト教会の信仰の指標というものが果たして確かなものなのかどうかという問題が古くからあったわけですね。ルターの頃からと言ってよいでしょうか。そのことが基になってかどうかわかりませんが、これと並行してギリシアの懐疑主義者の文献というものが発見され出版されるという中で、懐疑主義哲学が蔓延したわけです。更に、先ほど桑原先生がおっしゃったようなトマスの時代にはまだ共同体というものがあって、その共同体というものが何なのかということをその共同体の中で考える、そういう共同体の中の一員として自分が何を措定するのかという、そういう中でトマスがものを考えていたのに対して、デカルトの時代にはその共同体が崩壊しつつあったわけです。もっと言えば、デカルトが処女作である『音楽提要』を記し友人に献呈したのが一六一九年で、彼の哲学的思索が完成してから著された形而上学的著作『省察』（一六四一年）や最後の作品『情念論』（一六四九年）というのは、一六四〇年代の著作ですから、そのことを考えてみた時に、彼が活躍した時期は三十年戦争（一六一八～四八年）とほぼ重なる時代なわけです。つまり宗教戦争が起こっている時代なわけですね。魔女狩りだとか、異端審問が最も激しかった世紀が17世紀だと言われています。そのことを考えたときに、信仰の側から提示される命題を簡単には信じることはできない。むしろ信仰の側から提示された命題を盲信することによって起こってくるような論争、それから人が死んでいくという現実があって、その中で学の確実性を確立しなければならなかったという事情があると思います。そういう意味でデカルトの本心はわからないにしても、けれども、社会的な、現実的な問題を解決する上で有効な哲学として、彼の哲学を打ち立てようとしたのであって、現代のように利害関係、社会的な事柄から引き離された純粋な学としての哲学という、そういう哲学は、彼は考えていなかったと思います。こういう遠回しな言い方でしか答えることができないような気がしますけれども。

司会　お三方のお話も尽きないかと思いますが、時間的におしておりますので、そろそろフロアからご質問をいただきたいと思います。

笹澤（筑波大学）　お三人の話を聞いていて、かなり不満な感じを抱きました。「信と知のゆくえ」というのが今回のシンポジウムのメインテーマですけれども、肝心の「ゆくえ」の方が、全然わからない。行方不明になってしまったのか、行方知れずになってしまったのか、その部分を聞かせていただきたい。

まず棚次先生ですけれども、これは完全に時間の関係ですよね。発表原稿の最後の方に、信と知のゆくえとありますので、そこのと

ころにおそらく書いてあると思いますので、かいつまんで、そこをお話いただきたいと思います。

桑原先生ですけれども、桑原先生は現在の固有の状況というものを物語的な知の不在と捉えて、その対極にある物語的な知の典型としてトマスを持ってきた。そこまではわかるんですが、そういうトマスをご専門にされている先生の立場から、現状にどのようにコミットしていくべきだと考えているのか、そこのところの意見を伺いたいと思います。

名須川先生ですけれども、名須川先生はもっぱらデカルトが信と知についてどう考えていたのかというような発表でしたけれども、予め頂いているレジュメでは最後に、こう書かれているんですね、一番下の部分ですけれども。「近代科学の黎明期における知の在り方を、懐疑という視座から再考することは、科学への過信が批判される現代であればこそ意義を持つものとなろう」と。問題は、その意義がどういうものかということなんですけれども、今回はその意義についての発言が全然なかったように思いますので、その点について教えていただければありがたいと思います。

司会　それでは棚次先生から順にお願い致します。

棚次　「信と知のゆくえ」の、「ゆくえ」の部分ですけれども、確かに行方不明になっておりましたけれども、信と知をめぐって現状がどうあるかということを分析しますと、信ということが忘却されてきたと言いますか、あるいは過少評価されてきた歴史があるように思います。これは裏返しますと、狂信とか盲信というのがはびこっていた歴史があるということかもしれません。それから、知に関して言いますと、最初に言いましたように、特定の知に限定された知しか問題にされていないのではないかということがあるかと思うんですね。そういう現状を踏まえまして、一応、信と知のゆくえということで考えていきますと、信ということを復権する、復権すると言いましても、狂信とか盲信を推奨するわけではもちろんありませんが、知の体系の根底とか、知の根底に潜んでいるような根源的信ですね、これをもう一回自覚化するということが、哲学・思想レベルでは必要なのではないかと考えております。これは結局、先ほども申しましたように、宇宙とか人生に対する根源的信でございまして、他者の存在を肯定する、自己の存在を肯定するということを含んでいるように思います。どうも現代の諸問題の根っこには、こういう不信といいますか、自己の存在に対する不信と同時に、他者に対する不信という、信というものの欠落している状況があるのではないか。それを踏まえて、信の復権ということがひとつ課題になると思うんですね。もう一つは知の側面で言いますと、二重の知を統合するという課題がやはり出てくると思います。これは21世紀の社会がどうなるかということとつながってきます。レジュメに書きましたが、精神と物質が調和した文明になるだろう、それを目指していくことになるだろうと考えます。別な言葉で言えば、宗教と科学が何らかの形で連携する時代に入っていくだろうと。こういう表現は非常に陳腐で、ありきたりの表現になるんですけれども、21世紀はそういう、自己の理解、他者の理解において決定的な転回点がやってくる時代だと睨んでおります。

そこで最終的に問題になってくるのは、信とか知の問題ではある

んですが、やはり人間自身が宿している可能性が個の自覚を通して開かれていくということではないか、つまり、本当に待望されているのは、他ならない人間自身が己を発見していく、創造していくということではないかと考えております。非常にこれはオプティミスティックだと言われるかもしれないんですけれども、私はこう考えております。

桑原　トマス・アクィナスの研究者としてではなく、現代的にどのようにコミットするのかとの御質問ですが、これはある面において、信仰告白を問われているようにも見えるので、そういう意味では信仰告白を致します。私自身、クリスト者ですから、そういう意味において、語り継ぐ共同体の一員としての告白をしていくということはあると思います。ただ筑波大学の教員として、あるいは筑波大学哲学・思想学会において、ということでは、やはりなにがしか不適切なんでありまして、むしろ私はこういうことを考えたいんです。

私としては出会いの場というものの物語的性格を大切にしたいと考えています。たとえば、私がいまここでもってシンポジアストをさせていただき、そして伊藤先生、棚次先生、名須川先生とある場を共にし、そしていま笹澤先生からご質問を頂戴する、このあるひとつの交わりの出会いが、いまここで展開されているわけです。棚次先生とたぶん重なりますけれども、自己と他者に対する信頼とか、信の復権というものは大事である。私もまったく同感でありまして、やさしさとか温かさとか、そういったものがやはりいま失われていると思います。そこでそのつどそのつどの出会いの中における物語の意味というものをじっくり味わい、その結果何か温かさが残るような、そういうような態度でもって私個人はいきたいと思いますし、またそういうものが何らかの形で復権するような倫理学というものを今後考えていきたい。そのように考えております。

名須川　いただいた質問というのは、非常に鋭いご指摘だったと思います。私がレジュメの最後で、何が言いたかったのかと言いますと、先ず、デカルトというのは確実であると思われていた学知であったとしても、それから確実ではないと思われていたような蓋然的な意見であったとしても、それを一度自らが検討して、それが真に正しいのかどうかということを徹頭徹尾やっていこうとした人だと思いますが、現代はデカルトが最も確実だと思っていた原理の上で成立する科学というものが完成した時代なわけですけれども、そういった知に自分の実存を委ねるということをしない、そのためには単にその科学的知というものを捨てるといった極端な方向へ逸るのではなくて、その科学的知に代表されるような現在有効とされているその考え方がどういう資格において有効であるのかということを自らが見定めていくという視点、ものの考え方というものを、我々ひとりひとりが自覚的にもつことが必要だと思うわけです。

それから、もう一つは、現代は「知」といいましても、メディアというものが驚くべきほどに進歩しているわけです。インターネットというのはいうまでもなく、いままで不可能と思われていた映像や音声の世界を個人レベルでも表現できる時代になったわけです。われわれが携わっているような、こういう文字による学問の世界も、映像資料が大事になったり、例えば、ルネサンス研究においては、ほとんど美術史の研究ではないかと思えるぐらいに、映像というも

のを重視するわけです。実際、イコノロジーだとか、シンボリックなものを研究する上ではそういう映像というものが重要なものになってきているわけです。

しかし、この様に、デカルトの時代にはとても考えられなかったようなメディアというものを手にしたわれわれにあったとしても、文字による知というものに対する態度は一貫して変えてはならないと思うのですね。つまり、まだ、メディアというものがどのようなものであり、どこへ行くのか、それから今までの旧態依然たるわれわれの知というものが、そういったものを克服できるのか、あるいは克服する必要があるのかなどについては、検討の余地は残されていると思うのですけれども、そういったことも含めまして、デカルトが「懐疑」といったその内容を、つまり、その知が確実かどうかを検討していくということを新しい世紀に向けて、新しい世紀においてやっていくべきことなのではないかということです。

司会　信と知のゆくえについて、若干展望が出てきたかと思うのですが、他の方、いかがでしょうか。

荒木（筑波大学・現国士舘大学）　宗教学の先生と倫理学の先生と哲学の先生が前に並んでパネルを組まれるという試みがなされたということは、僕は非常にいいことだと思います。哲学・思想学会でこういうことをやったのははじめてなんじゃないかと思うんですが。これからもどんどん推し進めていただきたい、というのがまずあります。

私は「信と知のゆくえ―世紀末をこえて―」というテーマは、非常にいいテーマだなあと思ってさきほどから眺め返しておりましたが、「世紀末をこえて」という、この「こえて」というのが、痛みを伴いながら、クリティカルに問うている部分がありながら、かつ真正面からパネリストの立っている場所を問うわけですね。名須川先生がデカルトのコギトの置かれていた場所についてお話になった、三十年戦争の頃の大変な西洋の危機、信と知が崩壊して、何が確実であるかを探究するというところから、近代の知が諸科学が生まれたと言われておりますが、その近代の諸科学の知が、ガタガタと崩れつつある世紀末に立ってですね、お三方はゆくえを示されているんだと思うんですね。そういうふうに受けとめてみたらどうなんでしょうか。僕はそういうふうに受けとめてみたんですね。わかったと思いました。

棚次先生はやっぱり信と覚というところでおさえられている。知を支えている、もっと深いところにある知というか、信という。

次に桑原先生は、ニケーアの信条を出してこられまして、いよいよ出てきたなと思いまして、桑原先生は古代のアルケーに立っていらっしゃるし、名須川先生は近代の出発点にあったアルケーで懐疑の問題をいじくっていらっしゃる。棚次先生は、僕はモダンの後にポストモダンがきたのではなくて、ポストモダンはどこにもいかないので、やはりプレモダンなのではないか。それは人類のプレモダンであって、ソクラテスはダイアローグを進めて、mythとsymbolの、イメージのところに立ったという、そういう世界がもういっぺん再発見されるというか、結局、究極の物質といわれるものも、ブラックホールというものも、そのイメージの世界に近いのではないかと僕には思えたりするんですけれども、どうなんでしょうか。

しかし、この対話は非常に豊饒なのでもっとやってもらいたい。そのひとつの手がかりは、20世紀をどういうふうにみられるかということでもあるのかなと思ったりいたしておりますが。この対話はもっと続くのではないかと期待しております。

司会　ありがとうございます。20世紀をどう見るかという最終的かつ究極的なご質問が出たわけですが、いかがでしょうか。信と知の問題をめぐって、過去1世紀間を、つまり、われわれの世紀をどう見るのかということになるのでしょう。これに対する、お答えはいかがでしょう。かなり難しいと思うのですが、なにか手がかりがございましたら、お二方なりとも是非、応答をお願いします。

棚次　お答えになるか分かりませんが、先ほど申しました通り、信ということを問うてきますと、根本的にどこか信が欠落しているということを最近特に感じます。これが20世紀の特徴なのか、もっと前から続いている特徴なのかわかりませんが、それがまずあります。

知の問題でいいますと、やはり、非常に難しい問題かもしれませんが、仏教でいうところの無分別知みたいなもの、あるいはキリスト教世界で言うと、contemplation のようなものがあるんだと思いますね。それをきちっと神学者などは当然考えていると思うんですけれども、哲学などの思想の場で正面から問題にしなければいけないのではないかと私は思っております。ですから知ということで言いますと、分析的な知といいますか、論証的な知のみが前面に出てきて、もうひとつの知が忘却された。そういう特徴は今世紀だけの特徴でないかもしれませんが、ともかくも現在はそういう状況があって、もうひとつの知があるということに気づくということが決定的に重要だろうと思っております。

桑原　予めお配りしたレジュメには書いておいたのですが、他者なき知という状況がたぶん20世紀にかなりあったと思います。棚次先生がおっしゃった信の不在、いわば根底的な信の不在ということと通底すると思うのですが。

私といたしまして、やはり何らかの形で人と人とが温かい絆をもつということが、どこから出発するかということを原点にしてものを考えていきたい。もちろん、キリスト教がどのように復権するかということもあるのですが、いわば普遍的な問題の原点としては、人と人との温かき絆というものがいかにして成り立つのかということを中心にして考えていきたいと、そう考えております。

名須川　私の場合には、お二方の先生が、主に形而上の世界からこの世界を見ておられる気がするんですが、デカルトをやっていますと、どうしても形而下の方から形而上の方へ上昇していこうとするような思考というものが強くなってしまいます。そうではあっても、直観の知を探究していくということも棚次先生がおっしゃっているように大切なことだと思います。それと共に哲学の世界の中で、そろそろ五感というものを見直す必要があるように思います。これまでのところ、五感の中でも上級感覚であると言われてきた視覚や聴覚以外の味覚だとか触覚や嗅覚という――知といえるかどうかわらないのですけれども――ものが排除されてきた傾向にあると思うんですね。そこにこそ誤謬があるという形で。デカルトは感覚を批判していますけれども、しかしそれがどういう意味での批判だったのかということは、改めて考え直していかなければならないと思う

んですね。そういう意味で哲学の中で五感全体をどのようにしてわれわれが普段「学知」と称するものと結びつけていくのか、そういった資格をもう一度検討していくことも必要なのではないかと思います。

司会　20世紀をどう見るかという問題から、さらに今後の展望までお話いただいたわけですが、では次にベッカー先生、どうぞ。

ベッカー（京都大学）　申し上げたいことは山ほどございますが、とりあえずこの場に私も加えさせていただいたことに感謝させていただくとともに、荒木先生とともに、こういう三つの方面からいろんな課題をとりあげることは素晴らしい試みで、ぜひ今後も続けていただければと思います。

笹澤先生と全く同感で、まるで20世紀がなかったかのような演題で終わってしまっているような感じがするんです。同じ話は百年前でもできたと思うんですね。そこでプラグマティズムや不確定性の原理や相対性やフーコーやフェミニスト理論やディコンストラクションやいろんな運動はなかったのかと思ってしまうんです。

でもそれはいま話す時間がないので、たぶんうちの京大生、院生が言うだろうと思われる質問をひとつだけ言いたいと思います。

われわれが知っているつもり、信じているつもりのものは、自分自身、小さな自己、それから物質ないし資本であって、これらが消滅、敗北、死、とにかくこれらが全部終わってしまうということを知っていると、彼らは私に向かって言うんですね。で逆に、一人の哲学者、宗教学者として、新しい世紀に入る時点で、先ほど申し上げたことのような運動を受け、フェミニズムとかディコンストラクションとかを受けて、われわれがどうやって、おっしゃるような他者に対する信とか尊厳あるいはやさしい絆とか、善、美徳に対する再建築、再解釈でしょうか、つまり物質と自己と死以外のものについて、いかにして価値を置けるかという課題が、最大の信と知の課題ではないかと、うちの院生は思っているんですね。もしそのヒントとなるようなコメントでもいただければ、大変ありがたく思います。

棚次　大変すばらしい質問ありがとうございます。おっしゃる通りのことを私も考えておりまして、リアリティーがもてるものというのは、自己意識、身体あるいは物質とつながった部分ですね。それ以外は、リアリティーがあるとは思えないという状況がありまして、それを先生は小さな自己とおっしゃってますが、私の発表ですと、二重知の問題は二重の心になりまして、小さな自我、小我のことでございます。これは仏教的に言うと、生じては滅するようなカルマ的世界でございまして、実はそれ以外に仏教は無我という言葉でなんとか指し示そうと努力していると思うのですが、別の大きな自我、大我とか真我と呼ばれうるものがあって、仮に知は無分別知と呼ばれるものが働くとすれば、それは真我において働いているというようなことを申しますので、仏教の言葉で言いますと、小我以外に大我があると。あるということをどうやって論証するのかとなりますと非常に難しいので、これは自分の体験の中でつかんでいくしかないという。先ほど21世紀は人間自身の自己発見と自己創造が大事だと申しましたけれども、自己発見とはそういう意味です。大我があるということ、別の脈絡だとアートマンというかもしれませんが、

ともかくもそれが人間の本体だということをどこかで認識する必要があると私は思うんですね。これは私の信仰の世界だとか、私の宗教の世界だと言われたら、それまでなんですけれども、宗教というのは今後整理されていってもっとすっきりした形になっていくように、私は思っていまして、それは既存の意味の宗教ではなくなるというふうに考えております。以上です。

桑原　私がいろいろお話しました、物語性ということで関連して言えばですね、例えば、自分の、自分自身、物質、身体、資本、死しか信じられない一人の人が、自分の人生の物語というものをいかに大事なものとして捉え返せるかということだろうと思います。そしてそのために、おそらくその宗教的な啓示とか、神の愛を実感するとかいうことがあれば、もちろんそれができるんでしょうけれど、おそらくこれは逆に投げ返すような話ですが、先生ご自身が学生さんを愛する、愛して受け入れるというようなつながりの形の中で、何か違った方向にその学生は動いていくのではないかと思います。私自身もおよばずながら、なるべく私に接する人に対して、誠と愛を尽くしたいと思ってます。なかなかそうできないこともたくさんあるわけですけれども、そういうことを心がけることしかないのではないかと、そう考えます。

名須川　私はですね、形而下から思考を始める人間としてですね、その学生さんが言っておられることというのは――それはそれこそ先生が創作なさった物語なのかもしれませんけれども――その感覚というのはよくわかるわけですね。リアルなものというのは、触ってわかるものだとかそれに類するものがまずはリアルなものなのであって、それはそれとして納得できるでしょう。ではなぜデカルトの哲学の研究をやるかと言いますと、それとは対照的に、理解できないものがあるからなわけですね。あるところまでは理解できる。ですけれども、彼が超越といわれるものに向かっていくとき使われている概念がほとんどわからない。その論理構造というものもわからない。つまり非常に奇異なものに映るわけですね。

それから、いわば超越的なものを表わしていくような概念というのは――おそらく棚次先生が研究されているような言葉の中にあったのかもしれませんが――現在われわれが日常的に使っている日本語の中にはそれはまったくないわけです。それで、その中で学問をやっていくわけですから、当然、超越なんてわからない。だけれども、デカルトが真に何を意図して言ったのかということがわからないと、それは非常に気持ち悪いわけですよね。その気持ち悪いことをわかっていくためには、そういう超越者に向けて使われている概念を把握していく言葉、思考装置を鍛え上げていく必要があると思うんですね。それをわれわれが鍛え上げて使えるようにならなければ、おそらく先のベッカー先生のお話しの中にあったような学生を説得できないのではないか。つまり、その説得の背景には、桑原先生がおっしゃっているような信頼関係というものもあると思うんですけれども、ただ信頼のみによって受け入れたとしても、それを本当に知ったことになるのかというと、やはり言葉を使って、言葉の上で説得しなければならないという側面があると思います。そういう概念をいかにしてこれからわれわれが鍛え上げ、どんな人たちにも分かるような形で――ときとしてメディアを通じて――それを知

らしめることができるのかということを検討していく必要があるのではないかと、私の立場から思います。

司会　時間が超過してしまいました。もうお一方だけ、御質問いただきたいと思います。山中先生どうぞ。

山中（愛知学院大学・現筑波大学）　時間がないようなので感想的なことで恐縮なんですけれど、やはりベッカー先生、笹澤先生がおっしゃっているようにですね、「ゆくえ」という部分が気になるわけでありまして、少なくとも私が少し関心をもっている「カルチャー・スタディーズ」などでは、「信と知」と一般的に言わないで、誰の信なのか、誰の知なのかという問題が非常に重要な問題として考えられていると思うんですね。

このシンポジウムの前の研究発表にもありましたが、ブラジルという中で、さまざまな信仰が存在していて、信といっても知といってもですね、非常に多様性をもった形で捉えられる。そういう意味でグローバル化といいますか、そういう中での信と知というのは、かつて西洋の信といえば必ずキリスト教である、というようなものとは少し違っているように思います。そんな印象をもちましたので、例えば桑原先生が共同性という形で、信というのを括弧つきで限定されておっしゃっているというふうに理解すると、いま私が言ったような印象についてどのようにお考えなのか、その点についてだけ聞かせていただければと思います。

桑原　おそらく過去のように、例えばカトリック教会は、おそらくヨーロッパなどではかなり長いこと、ご存じのように、属地主義という形で、具体的な地域的共同体を基盤にしていたと思いますね。それと同じような在り方で、例えばカトリック教会ならカトリック教会が今後成り立つかというと、それはおそらく無理だろうと思います。したがいまして、カトリック教会にしても、他の一般的な意味における共同体にしても、グローバリゼーション、あるいは情報化、ＩＴ革命というこういった状況の中で、おそらく今までとは違った草の根的なある関心をもって、なおかつ人生の物語における重要な課題を共有する人の中で、何かが発生してきて、それが何らかの方向で、ある普遍的な知へ向けての方向性をもった形で、オリエンテーションされていくという形をとらざるをえないのではないかという、漠然とした見通しをもっておりますが。

司会　大変申し訳ございませんが、時間が過ぎてしまいました。「信と知のゆくえ」と題しながら、ゆくえについての考察が欠けていたというご指摘もあり、20世紀そのものを見落としているというご指摘もあったわけですが、そういうご指摘をしていただくという点も含めて、このシンポジウムは、それなりの盛り上りを見せたのではないかと考えます。このような試みが無事に果たせましたことは、皆様方のおかげでございます。ありがとうございました。では、これにてシンポジウムをお開きにさせていただきたいと思います。